

立正安国の浄行について

石川 教 張

一、立正安国論を習学し活現するために

立正安国論は、日蓮聖人が一生をかけて実践した誓願である。正法を樹立することによって安国を実現し、安国をめざすことよって正法を輝やかせて立正をなすとげる、という願業である。それは、仏教が社会的現実にかかに取組むべきなのか、社会に充満する苦悩を解決する仏教とは何か、時代や社会ときり結びながら、正法＝法華経の救済を実証していくありようとはなにか、という信仰と社会にかかわる根本問題を提示したものであった。

文応元年（一二六〇）、三十九歳の時に書かれた「立正安国論」は、この問題をまっ正面からとり上げ明示したものである。この書は、法華経信仰にもとづいて社会の平和と個人の幸福を実現させるために為政者を諫暁し歴史に生き、歴史をいかす仏教のありようを説いている。

矢内原忠雄は、「日蓮の公生涯は立正安国論にはじまり立正安国論におわる」といい、次のように指摘している。「日蓮は国を法によって愛したのであって、法を国によって愛

したわけではありません。国は法によって立つべきであって、法は国によって立つものではありません。立正が安国の因でありまして、安国によりて立正を得ようとするは、本末顛倒であります。日蓮の目的としたものは国家主義の宗教ではありません。宗教的国家であります。国家の為めの真理ではなく、真理的国家であります」（日蓮）「余の尊敬する人物」所収）

「立正安国論」で日蓮聖人が強調したのは、天災を人災にまで至らしめ、人々の悲嘆や死を放置し、しかも災難の根本的解決をめざす道から、人々の眼をそむけさせている当時の思想的、信仰的なあり方の問題である。この点は、「仏教の道理に盲目な者や迷う人は、みだりに邪説を信じて正しい教えを知らず、そのためにすべての仏や経をこの世から捨て去ってかえりみることもなく、守ろうとする志もなくなり、そこで経を守る善神聖人は国を捨て所を去ってしまったので悪鬼外道が災難をおこすのである」（立正安国論）と示している。これは、「仏法がしだいに顛倒してくれば世

間もまた濁乱する、仏法は体のようである。世間は影のごとくである。体が曲れば影もそれにつれて斜めになる。諸経与法華経難易事」という基本姿勢にもとづいている。思想が正しいかまちがつているかによって世間はよくもなり悪くもなるのであり、仏教の邪説はそのまま世間の濁乱、災難の根源を意味するといっているのである。

日蓮聖人はこの立場から、法然の撰撰集を破国の根源とし、それを奉ずる者への布施をとどめよと進言した。法然が正法法華経をカナメとする仏教全体を、捨て、閉じ、さしおき、なげうって、阿弥陀仏と浄土三部経に限定した点を指摘しつつ、これが仏教の一部に偏し正統を忘れ、釈尊一代の教説を破壊することによって、衆生を迷わす謗法である、と指弾した。

「弟子、一仏の子と生れて、諸経の王法華経に仕える身であれば、どうして仏法の衰微を見ながら、心より衷惜の情をおこさぬことがあるうか」という。国土の濁乱は、仏法の衰微によるものであり、仏法の衰微はこの娑婆世界を仏土とする釈迦仏・法華経の教説を否定する信仰の「体」が曲がつているからだとした。

日蓮聖人は、「この国は釈迦如来の御所領」(法門可被申様之事)、「この世界はわれらの本師釈迦如来の御所領」(この娑婆世界は釈迦如来のご進退の国土) (釈迦御所領御書)「この娑婆世界は、はるか昔よりこのかた、教主釈尊のこ

所領である。大地も、空も、山と海も、草木も、ほんの少しのものさえ釈尊以外の他の仏のものではない。また一切衆生はみな釈尊の子である」(一谷入道御書)とくり返しのべている。「法華経を修行する者の住む所を浄土と思うべきであって、どうして煩しく他処を求める必要があるう」ともいい、この国土を捨てて縁なき阿弥陀仏をたのんで西方浄土を願うのは「瓦礫の土を樂しむ」ものである(守護国家論)とも述べた。娑婆世界の穢土を厭離し、西方十方便のあなたに往生することのみを願うのは、釈迦仏がこの世界でめざす「穢土を浄土へ」の誓願と「仏国土を浄めよ」の教示を否定打破する現世からの逃避主義、来世期待の厭世思想であるということであろう。それが現実の災難による悲歎から眼をそらせ、その根源と対策を確立させることによって苦惱の現実を平和と幸福に切り開いていく人間の努力を失わせるものであったからである。

日蓮聖人は、謗法の朦朧から人々と為政者を覚醒させることによって、法華経の仏土をあらわす行為を、「これひとえに国土の恩を報せんがため」(安国論御勸由来)とのべた。これは釈迦仏の国土を謗法から守りぬく行動を仏国土への報恩として意識していたことを意味する。「立正安国論」は、次のように記される。

広くもろもろの経をひらいて見れば、いずれも、専ら謗

法の罪こそ重いと教えている。悲しいかな、皆正法の門から出て深く邪法の獄に入ってしまったことを。愚かなことではないか、悪い教えの網にかかって、永久に正法を誘う教えの網にからまれていくことは。この朦朧に道を迷い、地獄のもえる火焰の底に沈むことを、どうして愁えないでいられよう。苦しまずにおられよう。汝、早く信仰の寸心を改めて、速かに実乗の一善に帰されよ。そうすれば、すなわち世界は皆仏の国である。仏の国はどうして衰えることがあろう。十方はすべて宝土なのだ。宝土はどうして破壊されよう。国に衰微なく土が破壊されなければ、身は安全にして心は平和となるであらう。

日蓮聖人は、個人の幸福は社会の平和によって保障されるともいった。内なる法華経への確信は、外なる平和と幸福をめざすものでなければならぬ。その実現に向う原動力こそ、背信や不正にみちた謗法と権力の強圧によっても仏の国土は破壊されない、という確信である。外なる現実的苦悩の直視と背信の否定は、法華経による安国へと覚醒させ、内外にわたる仏土確立への自覚となる。それは、法華経による人間の意識変革と社会の仏国土浄化をめざす宣言といつてよい。それ故、「立正安国論」は最後に、「速かに謗法を退治することをめざし、早く平和を実現させるように努め、まず今生を安穩にしてから、さらにのちに死後に

助かるようにしたい」と結ばれている。現世が安穩でない限り、後生の救いも決定しえないという立場がここで強調されている。信仰の邪正をただして平和を追求する日蓮聖人の姿勢は、国家のための仏教をめざしたり、立正と安国を分断する立場ではない。謗法によって人々が背信と偽善を悔い改めないならば国土の災難は決してなくなることはない。国土の破壊は仏教の破壊につながる以上、その事実をあらわし、亡国より救国の道をめざさなければならぬ、とも示すのである。日蓮聖人はここから経文に導かれて、内乱と侵略の二難がおこることを予言した。「仏法の邪正が乱れたために王法もしだいに尽きてきた。けつきよくは、この国は他国に破られて亡国となるであらう」(本尊問答抄) とも述べた。この予言は、北条氏一門の内乱と蒙古襲来が現実となることによつて、二つながら的中したのである。日蓮聖人の主張した謗法批判、すなわち念仏無間、禪天魔・真言亡国・律国賊は、いずれも釈迦仏・法華経による娑婆世界の救済をまっ向から否定する考え方を批判したものである。もとよりたんなる宗派争いとか論難ではない。国土の平和を実現することによつて法華経の正しさを証明し、謗法の悔返しをめざすためであった。「立正安国論」を書いてから十余年後、蒙古襲来の危機がおとずれる中で、日蓮聖人は真言批判を中核としながら破仏・破国の思想を悔い改めさせようと努めることになる。諸宗は、ことごとく

幕府権力と結託して勢力を保持していたから、この諸宗批判は謗法の宗教者、為政者との思想的、社会的な闘いを意味した。そこから日蓮聖人に対するたび重なる弾圧がなされることになる。しかし、日蓮聖人は、受難こそ法華経を信じる自己を浮き彫りにする身証体験としてそれをうけとめたのである。

「立正安国論」の進覧は、松葉ヶ谷焼打、伊豆流罪からさらには竜の口頸の座より佐渡流罪へ、という受難の第一歩となったものである。受難により法華経を身証することを通じて、日蓮聖人は法華経の行者の自覚を高めていく。日蓮聖人が「三度の高名」としてあげた①「立正安国論」の提出、②文永八年九月十二日の平頼綱への強言③文永十一年四月八日の平頼綱との対面と諫言は、いずれも日本国を亡国の危機から救助する法華経諫晚行動であり、「ひとえに釈迦如来のみたましいが我が身に入かわ」って仏国土の恩を報ずる行動として発動されたものであった（撰時抄）。

「立正安国論」は「日本国のほろびんを助けん」（光日房御書）とした日蓮聖人における実践の先駆者意義をしるしたものであった。

二、浄仏国土と心身清浄

立正安国が、日蓮聖人一代の願業であり法華経信仰を實踐したあかしであり、聖人の一生が「立正安国に始まり立正安国におわる」といわれた根本的意味を、私たちは現代の「時」にたつて問い直すことが必要であらう。日蓮聖人

による「立正安国論」の進覧は、①三度にわたる国主諫晚の第一として位置づけていたこと、②国土報恩を目的として立正安国の諫晚を行なったこと、③事の一念三千の活現が立正安国論進覧の行動であったこと、④「立正安国論」を再三にわたつて浄書し諫晚しようとしたこと、⑤入滅直前に立正安国論の講義をしたと伝承されていること、等々の意味をもっている。これらに関して充分認識を深めることが要請されよう。同時に、これらの内容は、仏国宝土は永遠に破壊されず、それ故に「身は安全・心は平安」になるという信仰的確信を根底とし、しかも亡国の危機に瀕する濁悪謗法の国を浄め、謗法を悔返して法華経信仰の道に帰入せしめる諫晚実践に向う面を含むものである。従つて、立正安国は、世界の浄仏国土をめざし、人間の心身の「朦霧」をとり除き清浄にしてゆく心の転換を図ることである。それは、「仏国土を浄めよ」「穢土を浄土にせよ」「人間の心を浄めよ」というスローガンとして表現されるものといえよう。

この点から、立正安国とは、社会と人間の成仏をめざす清浄の行・浄化の実践（浄行）にはかならない。

「明らかなる事、日月にすぎんや、浄きこと蓮華にまさるべしや。法華経は日月と蓮華となり。故に妙法蓮華経と名づく。日蓮又日月と蓮華との如くなり」（四条金吾女房御書）。日蓮聖人における「日蓮」の名のりは、光明と清浄を象徴している。聖人は、仏使上行菩薩として妙法五字七字

の光明を暗闇の世に注ぎ、社会の闇と人間の無明煩惱の闇とを除くために献身した。また、汚濁にまみれた社会の中にすんで心身をおき、受難を通して法華経の清浄な花を開き、人々の「身の垢」と「心のくもり」を除いて法華経信仰による浄心を説き示した。「日蓮」は、光明と清浄を実現する行者の意味であり、日蓮聖人の「聖人」とは単なる尊称ではなく「三世を知る」者のことであり、国土の危急を救い世間のただ中であって世間の現実をよくわきまえ、救国と衆生済度を実行する智者の意味である。

これはいうまでもなく、法華経如来神力品の「如来の滅後において、仏の所説の経の、因縁と及び次第とを知りて、義に随つて実の如く説かば、日月の光明の、能く諸の幽冥を除くが如く、斯の人は世間に行じて、能く衆生の闇を滅し、無量の菩薩をして、畢竟して一乗に住せしめん」との経文と從地涌出品の「善く菩薩の道を学びて、世間の法に染まらざること、蓮華の水に在るが如し、地より涌出して、皆、恭敬の心を起し、世尊の前に住せり」の文字にもとずいている。

「日」は、光明をふり注ぎ世間と衆生の闇を除去する行の姿をさし、「蓮」は汚濁の世間にあつてなお汚染されない仏道習学のありようを意味している。

本来、「諸悪莫作・諸善奉行・自浄其意・是諸仏教」の教えは、仏教の普遍的な内容である。また法華経にも「若し

深心あらん者、清浄にして質直に、多聞にして能く総持し、義に随つて仏語を解せん」(分別功德品)と記されている。清浄・正直・多聞・信受・領解は、如説修行を誓願する者にとつての基本姿勢であるといえよう。

日蓮聖人における立正安国も、この光明と清浄をめざす教説とその実行をさしている。すなわち、清浄の願による仏道の実践であり菩薩行の結晶である。

この立正安国の教説は、日蓮聖人の社会実践を物語ると共に、法華経如来寿量品の世界をこの世に顕現するものでもあつた。「衆生の、劫尽きて、大火に焼かると見る時も、わがこの土は安穩にして、天・人、常に充滿せり。園林・諸の堂閣は、種種の宝をもつて莊嚴し宝樹には華・菓多くして、衆生の遊樂する所なり」。日蓮聖人は、法華経の説く「わが浄土は毀れざる」という釈迦仏の寂光浄土の宣言を受けとめ、「法華経を修行する者の住む所を浄土と思うべきである」(守護国家論)と述べ、仏の国は衰微せず破壊されないとの信仰的確信をひれきたのである。

立正安国の教説は、社会の浄仏国土によつてこそ、個人の安穩が約束される点をも示している。これは、法華経如来寿量品にあかされた「何を以てか衆生をして無上道に入り、速かに仏身を成就することを得せしめん」という釈迦仏の大悲に導かれて衆生救済に励んだことをさしている。

成仏とは、「微妙の浄き法身は、相を具せる」と三十二、八

十種好をもつて、用いて法身を莊嚴せり」(提婆品)と説くように、「淨き法身」を具現することにある。

これは、「若し法華經を持たんは、其の身甚だ清淨なること、彼の淨瑠璃の如く」(法師功德品)とも述べられている如く、法華經への信心受持が仏身をたもち仏意に参入する成仏の保障であり、身の「清淨なること」がそのしるしであることをあかしている。かの不輕菩薩もまた、但行礼拜にいそしみ、その罪を滅して法華經を聞き、「六根清淨」を得た後、法華經を説いて仏道に住した、とされている。

「其の所得の功德は、向に説く所の如く眼耳鼻舌身意清淨ならん」。「是の常眼清淨、耳鼻舌身意の諸根の清淨を得て、四衆の中に於て法を説くに、心畏るる所なかりき」(不輕品)。

また、觀世音菩薩は、「大清淨の願」をおこし、「真觀清淨觀、廣大智慧觀、悲觀及び慈觀」を体して救済の利他行に励んだ。「常に願ひ常に瞻仰すべし、無垢清淨の光あつて慧日諸の闇を破し、能く災の風化を伏して、普く明かに世間を照らす」(普門品)。これらの説示は、成仏並びに衆生救済の菩薩行にとつて、「清淨の心身」と「清淨の願」がいかに必須の要件であつたかを物語っている。教主釈尊もまた衆生救済の本願を成就するため一大事の因縁を説いたが、それは「諸仏・世尊は、衆生をして仏の知見を開かしめ、清淨なることを得せしめんと欲するが故に、世に出現したもう」(方便品)と語られている。いわゆる仏知見への開示

悟入は、法華一乘に帰入させる「欲令」の悲願にねぎざりおり、これらはいずれも「清淨なることを得せしめん」とする出世の本懐の実現を目的としていたことが明らかである。

日蓮聖人が、「無始の業障忽ち消え、心性の妙蓮忽ちに開き給ふか」(忘持經事)、「心の月くもりなく、身の垢消え、即身の仏となり給ふ」(光日尼御返事)と語つたのは、法華經への信心供養によつて心身の清淨が実現されることを通して滅罪と成仏が約束されることを示したものである。

こうした点から、立正安国は淨仏国土(謗法汚染の充滿する危機の時代のただ中において仏国土を淨化する実践)と無明煩惱や謗法、自利主義に心身がくもり垢にまみれている人心を清淨にするための実践を示すものと考えられる。ここに、「立正安国の淨行」に取組む必然性があると思われる。

社会不安と精神の危機がますます深まっている激動混沌とした現代において、立正安国の淨行は七百遠忌後の日蓮宗にとつての課題であると共に時代の要請にこたえる実践目標であろう。